

4 スプレーギク平張栽培の省力化体系を目的とした畝連続使用の検証

○ 結果の要約

- (1) 夏秋スプレーギク8月出し栽培から秋スプレーギク12月出し栽培で畝を連続使用する体系は慣行の栽培（全面耕うんして次作を行う）と比較して約6割作業時間を短縮できることが確認できた。
- (2) 畝を連続使用した秋スプレーギク12月出し栽培では、高温条件下で直挿し定植を行ったが、生育状況に大きな問題は認められず、8月出し及び12月出しと需要期をねらった畝連続使用体系として有効であることが確認できた。

1 課題の背景とねらい

- (1) 規模拡大を図るスプレーギク農家から作業の省力化が望まれている。
- (2) また、土壌水分の状況により次作の耕うんが遅れて計画出荷ができないことが多い。
- (3) そこで、夏秋スプレーギク8月出しから秋スプレーギク12月出し栽培に向けて畝を壊さず連続して使用する体系を検証する。併せて、他の生産者の事例を含めて考察する。

2 関係機関団体との連携、役割分担等

園振協沖永良部支部花き技術部会及び各町技連会花き部会と連携し取り組んだ。

3 実証内容

- (1) 実証場所 和泊町M氏平張施設ほ場
- (2) 供試品種 夏秋スプレーギク
サザンチェルシー（桃）、サザンチェルシーイエロー（黄）、セイイレルダ（白）
秋スプレーギク
セイヨーク（桃）、テンダー（黄）、シューリニア（白）
- (3) 区の構成 夏秋スプレーギク8月出し+秋スプレーギク12月出しの畝連続使用体系
実証区のみ、対照区は設定していない
ア 夏秋スプレーギク8月出し
(ア) 定植：令和3年5月6日（発根苗）
(イ) ほ場準備：D-Dで土壌消毒後、定植前に（ウ）や（エ）を土壌混和
(ウ) 施肥量：N：P₂O₅：K₂O=33.6：0.0：6.4（kg/10a）
(エ) その他：バガス800kg/10a、ネマキック粒剤15kg/10a、
AG土力（土壌改良資材）50kg/10a（センチウ捕食菌及び有用菌を添加）
イ 秋スプレーギク12月出し
(ア) 定植 令和3年9月17日（直挿し）
(イ) ほ場準備 夏秋スプレーギク収穫後の畝を連続使用
畝の中だけ定植前に（ウ）や（エ）を土壌混和
(ウ) 施肥量 N：P₂O₅：K₂O=27.2：0.0：6.4（kg/10a）
(エ) その他：牛糞堆肥225kg/10a、米ぬか150kg/10a、
ネマキック粒剤15kg/10a、粒状チャンスS（根の活力資材）80kg/10a

4 結果及び考察

- (1) 夏秋スプレーギク8月出し栽培から秋スプレーギク12月出し栽培で畝連続使用する体系は慣行の栽培と比較して約6割作業時間を短縮できることが確認できた（写真1，表1）。
- (2) 畝連続使用した秋スプレーギク12月出しでは、高温条件下で直挿し定植を行ったが、草丈のばらつきが少なく大きな問題は認められず、8月出し及び12月出しと需要期をねらった栽培体系として有効な技術であることが実証された（写真2，写真3，表2）。
- (3) 慣行である8月出し栽培後に全面耕うんして次作を行う体系は、雨天により土壌環境が悪い場合は3日以上ほ場準備ができないことがあり、計画的な生産が困難である。一方、畝連続使用体系は、畝上部のみの耕うんであるため、雨天により土壌環境が悪くてもほ場準備が可能であった。
- (4) 夏場、実証農家以外の土壌消毒していないほ場で立枯病が多発した事例がいくつかあった。今回の実証では、夏秋スプレーギク8月出しの次作秋スプレーギク12月出し栽培で品種によっては、直挿しによる生育不良や立枯病等で約1割前後欠株が発生したが、大きな生産ロスはなく、畝連続使用体系について正しく評価できた。

5 残された課題と対応

- (1) 次年度の畝連続使用体系の再現性の確認
- (2) 立枯病抵抗性品種の選定
- (3) 畝連続使用体系の現地事例の整理、研修会での情報提供

6 執筆者 渡辺 剛史



写真1 夏秋スプレーギク栽培後の
の畝上部のみを耕うん

表1 畝連続使用体系の10a当たりの作業時間の比較
(単位：分間/10a)

作業工程	対照区 慣行の栽培体系	実証区 畝連続使用体系
全面片付け	100	0
全面耕うん	167	0
畝のみ施肥	67	67
畝のみ耕うん	107	107
畝上げ	107	107
ネット張り	107	0
計	655	281



サザンチェルシーイエロー



セイレルダ

写真2 夏秋スプレーギク8月出しの生育状況



セイヨーク



テンダー



シューリニア

写真3 秋スプレーギク12月出しの生育状況

表2 畝連続使用による秋スプレーギク12月出しの生育特性

	生存株率 (%)			草丈 (cm)		
	セイヨーク	テンダー	シューリニア	セイヨーク	テンダー	シューリニア
A	95.0	100.0	95.0	105.6	117.4	105.8
B	90.0	100.0	82.5	102.2	118.8	101.8
C	85.0	100.0	100.0	104.4	119.4	102.8
D	82.5	100.0	95.0	106.0	117.6	104.0
平均	88.1	100.0	93.1	104.6	118.3	103.6

* 調査株数 1区40株 4連制, 調査は令和3年12月16日